

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第卷七十五第

需給統制の諸方法……………高田保馬

支那人に於ける金屬主義思想と  
名目主義思想について……………穗積文雄

桐生足利織物業に於ける金融……………田杉競

勞銀と繁殖率……………青盛和雄

交換の一般均衡に就いて……………金森恒利

江戸時代の經濟史書……………堀江保藏

叢報

行發月一十年八十和昭

# 勞銀と繁殖率

青 盛 和 雄

## 一 序 説

茲に Paul Howard Douglas (1892) の著書「勞銀理論」中の一章、「經濟學者及び統計學者の見たる長期的勞働供給」といふ箇所の緒論となれる、「勞働増加に依りて可能なる生活基準の上昇は人口増大に如何なる影響を及ぼすか」の問題を、「勞銀と繁殖率」と題して要約して置きたい。意味は T. R. Malthus 以後最近までの經濟學史上に於ける人口理論に一應の概觀を與へることに資するにあるであらう。

原著者ダグラスに就ては米國シカゴ大學に經濟學の教授たり、他にも勞働問題に關する専門學者として權威ある著書名を窺ふに過ぎないにしても、此際に於て英國の信用理論家なる Clifford Hugh Douglas (1879) と混同せぬ必要がある。又吾人の所謂繁殖率とは抽象的なる妊孕力や増殖能力ではなく、具體的なる人口増減率であつて出生數から死亡數を控除せる差額であることを斷つて置くべきであらう。普通には之を人口の自然増加率と稱してゐるけれども、勞銀や生活水準の與ふる影響を考へるに際して、殊更らしく人間の繁殖率が自然的能力其儘であるかの如く社會に超然たりとは考へ得ないから、既述の論文より、<sup>1)</sup> 自然的なる冠詞を取り去つて、而も繁殖力から繁殖率の考察へと問題を前進させたいとの希望に由來する自分一個の慣用語に過ぎない事となる。

従つて現下の非常なる戰時經濟の進行に伴ひ戰力増強と増産への耐乏生活が人口趨勢に如何なる作用を及ぼす

1) The Theory of Wages, N.Y. 1934, pp. 315-351. Chapter XIII. The Long Run Supply Curve of Labor as Conceived by Economists and Statistician (Students of the Population Problem).  
2) Paul H. Douglas; Real Wages in the United States 1890-1926, Bost. 1930.

か、又高賃賃や家族手當の人口政策上の効果に就ても若干の考察を加へ度いと思ふ。人口増強への要請が緊切なるだけに、生活水準の上昇又は切下げに依る繁殖率の緩急に就て全く相對立する見解が如何にして矛盾なく相協和し得らるゝかど本論の言はゞ研究目的の一つとなるであらう。本稿は光づマルサスに續く一聯の古典派經濟學者と近代統計學者のこの問題に對する見解の紹介から初められる。

マルサスの思想中で興味深き點は實質賃銀の増加と繁殖率の減少とが循環を成すといふ見解である。實に彼の見出せる斯様な循環は決して一方的ではなく、次の如き二面性を有するものと信ぜられて居る。<sup>4)</sup>

即ち一方では人口増加が賃賃を物理的なる最低限度にまで引下げると共に、他方では賃賃低下及び利潤の増大に伴ふ人口増加は、より多くの食糧を生産せしむる様に農耕方法を改良せしむる原因となり、斯様な食糧増産は繁殖率の緩和と共に、以前に存在せるが如き人口對食糧の一人當り生産額を恢復せしめ、以て均衡を得せしめることを助けるのである。この際の解釋に従へば、人口數は増産され得ただけの附加食糧のお蔭で増加したのであり、斯くして人口の長期的變動傾向は引續き上昇したけれども、生活水準は依然として恒常性を維持したことになる。

次に Ricardo に依るマルサスの解釋は、勞働供給費用曲線の恒常性といふことである。

マルサスの人口理論を引繼いで、之を社會的生產物の各生産要素間に分配する問題に應用したのはリカードが最初であつたが、彼はマルサスが後年に至つて試みたるが如き命題の限定には全く觸れては居らぬ。リカードは長期に於ける賃賃は其相應なる勞働の「自然的價格」が存在すると考へた。この自然價格なるものは、『勞働者が銘々の生存を維持し、種族を永續させて、而も殖えも減りもせぬ程度の生活を可能ならしむるに必要な額』

Wages and the Family, 1925. Standards of Unemployment Insurance, 1933, etc.

3) 拙稿「都市及農村の自然的繁殖力に就て」經濟論叢昭和十七年十二月、第十五卷、六號。

4) P. H. Douglas; *ibid.* pp. 321-323.

5) D. Ricardo; *Principles of Political Economy and Taxation*, ed. by E. C. K.

であるに過ぎぬ。「食糧及び必需品に依りてのみ推計されるとしても、勞働の自然價格は絶對的に固定し又は恒常であると解さるべきではない」とするリカアドオの要求にも拘らず、實際に於て勞賃の自然的相場は長期間を通じて事實上恒常であり、且齊一である。斯かる勞賃の自然的相場は實際的に固定なるのみならず、而も事實として物理的生存の可能なる點に近迫すると考へられてゐる。<sup>6)</sup>

斯くて根本的には勞働供給の弾力性は無限であると見做す所謂勞銀基金説の背後にある人類繁殖力の無限なる連續といふ假説に對して、其後我々人間の繁殖力の量的法則に一定限界ありとの見解から、人口増殖率を無限にして直線的なる變動と見做さないで、之に云はゞ取枠を嵌める仕事を試みた人々として、十九世紀に於て先づ *Outelet* や *Verhulst* を擧げてゐる *ダグラス* は、本世紀に於ては *Raymond Pearl* の「人口増殖の法則」を掲げ、繁殖率の無限延長を否定し、*パール* の所謂 S 字型曲線に依つて、人口減退を主題とせる近代的なる人口理論の紹介及び批判を試みて居るが、<sup>7)</sup> 此點に關しては將來の別論に譲る外なく、茲では初め冒頭に掲げたるが如く、斯かる一般的なる人口増殖力の停滞又は低下が勞働力の長期的なる供給に如何に影響し、惹いては勞賃や生活水準の推移が繁殖率と何等かの關係があるか否かを検討せる所謂人口學に於ける經濟理論に問題を限定して、之を取扱はんとするに過ぎない。

## 二 古典的理論

人々が子供を儲けるよりも寧ろその方を選ぶ様な生活水準の向上或は物財及び勞務の量的増大は人口増加率を緩和するに至る。<sup>1)</sup> 斯の如くより多くの費用を喰潰す所の生活水準が何故に賃銀生活者に依つて自分等の生活地盤

Gonner, London 1929, pp. 70-74. 岩波文庫版、譯本、74頁及77頁、第五章、賃銀論、參照。

6) Douglas; *ibid.*, pp. 324-325.

7) Raymond Pearl; *The Biology of Population Growth*, N.Y., 1925, pp. 25-44, 131-57, cf. *Studies in Human Biology*, pp. 571-83.

として採擇されるであらうか。賃銀上昇は労働者に昔から欲しただけの同様な基礎的物資の一掃を其儘に止めて置くであらうか、其とも或は彼等をして一度は享樂出來たらと思つてゐた新規な快樂を要求せしめ獲得させる様に、各自の心を搖り動かすのではあるまいか。經濟的不平等が可成りの程度に存在することは、より低い經濟生活に餘儀なくしてゐる人々の羨望心を刺戟する結果として、この一群の人々をして、今迄よりも裕福に暮してゐると見られ得る如き快樂や贅澤をさせるに至る。究極に於てどの程度まで労働時間を底下させるかといふことが出生率の減退に轉向させんとする誤れる欲求に人々を従はせるのであらうか。斯かる論點はマルサスの論文の最終版以來一世紀間に於ける討論であつた。<sup>2)</sup>

マルサスに續く經濟學者の時代は、實質收入の増加が出生率を引下げることが如き力として作用するか否かといふ問題に分割されて了つた。James Mill や McCulloch は別の見解であつたが、マルサス自身よりも彼を繼承せる人々の方が人口論初版に於ける原理を一層力強く支持した事になる。マツカロックは宣言して曰く。<sup>3)</sup>「人類種族の繁殖力は長期間をとれば、常に生活資料の増加を凌ぐ程に大である」。假令労働者の實質收入が突然に二倍となつたにしても、「斯かる有力なる刺戟は増殖原理に作用して、非常に短時間で再び元の生存資料水準にまで人口を引戻すであらう」と。大家族の父たるにふさはしきジェームス・ミルの分析は更に憂鬱な調子をさへ帯びてゐる。即ち人口は資本供給よりも遙かに早く増加する傾向があり、而も勞賃はこれ等二要因間の比率で決定されるのだから、其低落は『永久化傾向』がある。諸國に住居せる大部分の人々が置かれてゐる所の貧困や窮乏は斯かる傾向の決定的なる證據として引用されるのであり、斯様な窮乏に對して、<sup>4)</sup>「人口よりも資本の増加が一層早くなることが不可能であつた」と見做されるのである。

8) Douglas; *ibid.*, pp. 327—344.

9) 南亮三郎著「人口原理の研究—人口學建設への一構想」二六二頁、以下三〇九頁、まで參照。

1) Douglas; *ibid.*, pp. 344—348.

以上は普通に誇張される點を興味深く豫告せるものであり、各要因一單位當りの報酬は供給の比較的なる弾力性に依存し、弾力性に乏しき要素は常に他の弾力性大なる要因の犠牲に於て獲得されることとなる。猶又、ミルの見解に従へば、勞賃なるものは現實に低落の傾向にあり、この事はリカアドオ、マツカロック及び青年期マルサスが勞賃なるものは恒常性を維持する傾向ありとした學説とは大いに異なる。斯かる差異はミルが人々の經濟状態は原則として以前より改善されてゐると見做せる暗黙裡の假定に基くのである。其故にミルは人口壓力なるものに勞働者が會て享受してゐた餘剰に喰込む作用ありと見た。リカアドオやマツカロックは他面に於て勞働者は生存の最低限で生活するを常とし、人口擴大が舊き均衡を再現し、又は一時的に賃銀を最小限度以上にまで引上げる程度にまで人口數を減退せしむるが如き原因となると見做して居る。

斯の如きミルの見解は、後進産業社會に於ける勞働者と同様に、原始人はこれまで勞働者の實質收入が増加して來た今日以後に於ける英國の勞働者集團よりも、遙かに低位なる水準に甘んじて生活してゐることを指摘せる *Senior* に鋭く挑戦を試みてゐる。其故に人口は資本よりも遙かに急速に増加する傾向があるにも拘らず、實際は反對に資本増大の方が人口増殖よりも速かである。勞働は實に資本よりも更に弾力性乏しきものであり、貯蓄は子供が生れるよりも遙かに急速に惹起されると云はる。併し斯様な理論はマルサスに續く思想と如何に調和するか。其理由は「婚約取定めに際して慎重であり、可成り無駄な費用のかゝる習慣がある爲に、絶えず窮乏といふ積極的制限を作用させる様に生存手段の限度にびつたり」と人口を抑制して、人口壓力に對する唯一の永久的保護對策が採られてゐる」事で説明される。

併し斯かる慎重さの習慣は「文化的なる」社會にのみ存するものであり、貧澤にして見苦しからぬ生活に對す

- 2) C. E. Stangeland; Pre-Malthusian Doctrines of Population. N. Y. 1904. On the Principle of Population by T. R. Malthus. 7th ed. cf. Field; The Malthusian Controversy in England.
- 3) McLulloch's edition of Smith's Wealth of Nations. 4 ed., Edinburgh 1850,

る強烈なる欲望は富裕な人々のみに認められるのであつて、『國家が文化的となり富裕になるに伴つて、積極的制限は豫防的制限によつて代替せしめられる』。斯くて人々が生活必需品の缺乏に悩むが如き危険は時と共に次第に減少するだらう。『富が増殖するに伴つて、一世代人にとつて贅澤であることも彼等の子孫には見苦しからぬ生活程度となる』。斯くして出生率は收入の増加に逆比例して低落する。

然れどもシーニョアは實質勞賃水準に於ける所與の増加に依り惹起されたる減少率に就て、あてずつぼうに憶測して妄言するの危険を冒した譯ではない。勿論彼は死亡率への相對的影響を述べてはゐない。勞働者の經濟状態を改善することは疑もなく死亡率を低下させるであらうし、又この事は出生率の減退を補償して餘りあるものであつた。もし然りとせば、此は以前にもまして急速な率で人口を増殖する原因となり、二原因の一方又は兩方に依りて阻止されるのでなかつたら、勞銀は以前の水準より低下するであらう。第一には實質勞銀水準を更にもう一度引下げるが如き生産に於ける新規なる改良の可能性を與へるものであり、他方に於て第二としては出生率を更にもつと引下げて、結果として取入れた收穫物にまで喰込むことになる。これは死亡率減退に依りて妨げられたる均衡を恢復して、人口が増減せざるが如き平衡を更に高い水準に於て再現せしむるに相違ないのである。

他面に於てシーニョアは自分の地位を注意深く意識的に考へては居ないにしても、彼の理論が餘りに明瞭に依據してゐる信念は、勞賃上昇の結果たる人口増殖は決して賃銀を舊水準にまで引下げるには足りないことであつた。其故に勞働の長期供給曲線は緩漫に上昇して直進するけれども、その傾斜率が果して幾何であるかは確定して居らない。

J. S. Mill が幾分悲觀的乍ら、勞銀上昇が恒久化されるであらうとして認めてゐるのは、『若し安樂なる生活

p. 133 and p. 1. (Douglas, *ibid.* p. 345.)

4) James Mill: Elements of Political Economy, Lond. 1826. Chapter II. pp. 40—46, (cf. Douglas, *ibid.*, P. 345, Foot-note.)

5) N. W. Senior; Political Economy. Lond. 1850. p. 42.

基準が階級全體に依つて必須だと見做されるならば、賃銀は永久的に引上げられる』ことである。然るに勞働者は多産にして生活程度を上昇させる欲求を殆ど起さない事實に對して彼は次の如く曰ふ、『勞働者階級の生活狀態を改良することは一時的なる餘剰を與へる以上の役割を果すものではなく、斯かる餘裕も急速なる勞働者數の増加で忽ち擴充される』と。斯様な人口量の増大は子供の死亡率低落からも、『又早婚や更に多數の結婚若しくは一婚姻當りの出生數上昇からも』結果するであらう。

出生或は結婚數を減退させるが如き生活に必須なる標準と見做されて居ることの斯様な變化は、勞働者を多少でも凌ぎよくさせる様な改善から起るものではない。勞働者にほんの僅か乍ら其の意見に影響を與へる事件といふものは、彼等の習慣や要求の上に何等永久的なる感銘ではあり得ないで、又元の木阿彌の状態に緩慢乍ら逆戻りさせるのである。實質勞銀の一時的上昇を永久的利益たらしむることは、『彼等の状態に大變化を來さしめることで充分であるに相違ない。即ち一世代年間を通じて人口増殖に加へられる如何なる刺激があるにもせよ、之を無視するが如き多年に亙つて感得せられるだらう様な變化が生ずる必要がある』併し斯様な勞銀上昇はごく稀にしか起らぬので、ミルの主張はリカアドオの其と大同小異であり、勞働の供給は主として恒常なる費用といふ條件の下に爲されると基本的には考へられて居る。

### 三 近代的理論

以下に於て數人の著者が強張してゐるのはより高い生活水準は出生率を上昇せしめるよりも寧ろ減退させる傾向に有力に作用することである。就中顯著なのは Doubleday や Herbert Spencer の如く斯様な減少を生理的

6) J. S. Mill; Principles of Political Economy. (Ashley's edition) p. 348.

7) Ibid., p. 161.

8) Ibid., pp. 348—9



因に歸して居る人々があり、他方では Dumont の如く社會的並びに心理的原因に歸せしめてゐる人である。<sup>1)</sup>

ダブルデイは「眞の人口原理」なる著書中に於て、<sup>2)</sup> 妊孕力は榮養に逆比例して變化するといふ命題を提出してゐる。この議論を支持する爲に、英國の世襲貴族に於ける數的減衰の事實や、友愛教會 (フニーカー) の教徒を増加させるべき生得權の本來的に存在しないことを、スコットランド北部なる山岳地方住民が經濟的に酷迫なる状態にあるに拘らず、却つて急激なる繁殖率を示すことと對照的に述べてゐる。其故に食物や榮養の適當なる減少が繁殖力に有利であるとし、其の過制攝取や贅澤をば人口減退原因となすダブルデイの理論は、勞働の長期的供給豫定は減少する傾向にあり、惹いては實質勞銀の高さは勞働供給と逆比例の關係に變化する、といふ見解に等しいと謂ふべきである。

スペンサーの所謂個性自覺と種族創生との間に於ける鬭争でふ有名なる理論は、<sup>3)</sup> 知的又は情的なる事項に精力を費消することが増加すれば、其だけ妊孕力は減退するといふ信念に基いてゐる。スペンサーは結論的には、各個人や社會の經濟的地位が改善されると共に、出生率は次第に減退の方向に進んで行くと思つたのである。斯様な興味深き假説は決して既往に於て爲し來つた所の生物學や生理學的研究から適切なる確證を得て居る譯ではなし。尤も Brownlee 博士や Nitti 氏並びに Gilh 教授は現代の生活が夫婦間の妊娠可能性を減退せしめたかの如き生理的變化を誘導したと一應外見上に於ては信じて居るらしいけれども、斯かる憶説は何等科學的根拠を認められない。何故かと問はれるならば、所謂現代的なる文化生活なるものは營養や生理的變化のみで一義的に定義し得られない複雑なる諸要因を含むからであると謂はねばならぬ。類似なる批判は其他の見解に對しても必要と考へられるので、結論に於て再び觸れようと思ふ。

- 1) Douglas, *ibid.*, pp. 348—351.
- 2) T. Doubleday; *The True Law of Population*, London 1842. pp. 5—6. and pp. 25—29.
- 3) H. Spencer; *The Principles of Biology*, (1894) Vol. II. pp. 397—508. (Theory

Dumont の注目すべき著作「人口減衰と文明」<sup>1)</sup>は佛蘭西人の生活觀察に基くものであり、經濟狀態の改善は人口繁殖率の減退を來すとする命題を辯護するものである。併し乍らダブルディーヤスペンサーと相似ざる點は、減退を生理學的原因よりも寧ろ社會的原因に歸屬せしめてゐることである。彼の指摘に従へば、封建制度の崩壞や個人主義的なる民主主義の勃興が固定した世襲的なる社會階級を殆ど消失せしめた。立身の道は能力ある者に開放さる。優越の地歩を占めんと欲する人々は相互に競争して、政治的な地位或は知的又は美的なる地位を獲得せんとし、就中最も重要なのは經濟力を得ようとすることである。この競争への參加を懈ることは殆ど出來ない。何故ならば、若し競争をすまいとすれば其人は程なく退陣を餘儀なくさせられる。斯の如く現世間に先陣を爭ふ鬭争場裡に於ては、子供といふ寶が一般に邪魔物扱ひにされ易い。子供が少なければ、子供の少數なることに因つて、其だけ多くの精力と金が各人の特權を確保する仕事の爲に集中出来るからである。斯くてデヌモンがいみじくも名付けた「社會毛細管現象的吸引力」なる言葉は、個性の自覺といふことが種族の創生と共に現實に吾々が絶えず鬭争を續けてゐることの原因となるのである。此際に於てキプリングの警句「<sup>2)</sup>熱帯の果から兩極地帯にまで旅行するには、獨り旅する者が最も速く行く」と云へるを引用せるダグラスは、我國に於て人口に膾炙せる俚諺「旅は道連れ世は情」の永續する滋味を知らざるもの如くである。

さて猶上述の如く、各自の地位改善に殆ど絶望して意氣銷沈せる貧者は、「どうか斯うか暮るか暮して行ける」との期待を持てる人々よりも、遙かに迅速に養はれるだらうことは當然である。然れども物質的狀態の改善は精神の屬性として其自身(物質的繁榮)を造出する傾向があり、生活に利益を得させる趣味を興へることに依りて更により多くの欲望を自覺めさせて、お互の間に社會的にして經濟的なる進歩を競はしめる原因ともなるであらう。

of the conflict between individuation and genesis.) 高島安倍譯「人口論」三四八頁參照。

4) Brownlee; "Germinal Vitality" (1908) "Present Tendencies of Population in Great Britain with respect to Quantity and Quality" (1925).

斯くて民主的にして産業的なる社會は、實質賃銀の上昇をば人口増殖率を引下げる力に轉換して了ふ。この事は西洋文明に於て至る處で作用してるとデュモンの信じてゐた傾向であつた。

Benano や Mombert も恐らく實質勞賃の上昇が出生率減退の原因となると見做せる命題を最も徹底的に辯護して來た人々である。彼等は歐洲の最も繁榮せる諸國程、其他の繁榮度合に於て劣れる國々よりも出生率結婚率が可成り低かつたことや、更に各國内に於て經濟的規模の低い人々の間に於ては、其よりも一層裕福な階級に於けるよりも比較的出生も多く結婚年齢も低いといふ事實を指摘して居る。更に歐洲の勞賃收入で暮してゐる階級間の出生率下落は、其の實質賃銀も上昇して來た十九世紀後半期の間中繼續したといふことを豊富なる統計資料で指示して居る。この事は根本的には結婚者が少なくて、而も初婚平均年齢の遅延を原因とするのではない。

この後者の要因は英國では作用したが、獨逸に於ては都會に移動せる農業勞働者の經濟狀態の改善を安全に確保し得たことが結婚の平均年齢を現實に引下げるに至らしめたのである。其故に減少の大部分が淵源する所は一婚姻當り出生數の減退に認められるのである。

斯かる減退は夫婦の双方をして以前に享受し得た其他の娛樂を子供と一緒に暮す場合に比較して、其代りに物質的なる繁榮の上昇を一層高く評價せしむる原因となる。極貧の家庭に於ては性的なる快樂が支配的なる歡樂であると、ブレンターノは揚言してゐる。されば極貧者には其他多くの満足を經濟的手段の缺除の故に妨げられてゐる以上、彼等が常に性的嗜好を有し、この傾向が勞働生活者達の多くを特徴付けてゐる汗と泥に汚れたる姿に依つて更に強調せられる。この事が恐らく鑛山の勞務者階級に於ける出生率をして、同等の熟練を要する其他の職業に従事せる勞働者に於けるよりも高からしめてゐる理由の一つでもあるだらう。

- 5) Corrado Gini; "Decline in the Birth-rate and the Fecundability of Woman" Eugenic Review. (1926) cf. F.S. Nitti; Population and the Social System. Lond. 1894.
- 6) Arsene Dumont, Depopulation et Civilisation, Paris 1890. 130 p. "Lois de

實質賃銀の上昇は家族をして更に多くの娯樂を享受せしめ、この事は婦人達に『彼女等の生存の純粹なる意義を妊娠と分娩と育児の裡に認むべきを却つて嫌惡せしむる氣持を起させて、斯かる惡趣味が忘却すべき娯樂の多様性を逆に増し、娯樂が蠱惑的性質を含むに比例して益々出産減退が顯著になる』<sup>10)</sup>。

同様に夫も亦子供の少ないことを望む理由は、單に妻の健康を考慮するからばかりではなく、「若し彼が多數の子供を生存させようとすれば、其爲に増加する自分等の生存資源への需要は子寶以外の方面に對する財産使用を割愛させるに至るからである」。一旦斯様な新しい娯樂を享受し初めると、彼は若早や家族の大いさを新規に増さうとすることを斷念するばかりでなく、而も子供數の減少を欲するに至る。勞働者は若し必要な資力が自由になるならば、新しい娯樂に均霑したのであつて、この事はブレンターノの述べる所では、「最初は上層階級に於てのみ見出された状態が次第に一般的に普及した」のである。

子供に對する愛情がより深化すれば同一方向に作用が及ぶ。『親達は自分等が現世に齎らした生物の人格と實數の兩者に對する自己責任に益々意識的となる。……中略……彼等は子供によりよい教育を施し、一層大なる世襲財産を確保して現代的なる生存競争に一層完備せる武裝をさせようと努力する』。

上述の議論の根據となつてゐるのは歐洲全體の出生率、結婚率の廣般なる統計記録であるが、斯かる論法は斟酌に値する事項である。蓋しブレンターノの取扱振りには一の重大なる手抜きがある。<sup>11)</sup>即ち之は死亡率に關する見落しであることは、別に指摘はしてゐないけれども、彼の弟子クチンスキーの論文にも見られるが如くである。<sup>12)</sup>マルサスに續く人々の主張は、實質勞銀の上昇に伴ふ出生率の減退を示すことのみで完全に駁撃論破され得るものではない。勞働者の長期的供給は出生率のみならず、死亡率に依りても影響を受ける。事實上、ブレンターノ

le capillarite sociale."

7) "From the utmost tropics up to the Pole,  
He travels the fatest, who travels alone" (Kipling's phrase)

8) Brentano; "The Doctrine of Malthus and the Increase of Population During

1) が最初に書いた時代には、死亡率の下落は出生率よりも急速であつた。其故に人口及び勞働供給の大擴張が行はれたのである。ブレンターノの推理が爲されて以來、往々にして勞働の長期的供給は減少傾向にあり、其の供給が少き所では高勞銀を生ずると述べられる模様であるけれども、この事は出生率のみを考慮に容れるならば正當であるが、併し全人口や繁殖率を考慮に置かならば、未だ斯かる場合は現實には見られなかつたのである。<sup>13)</sup>

#### 四 結 語

以上の要約に續く箇所に於て、ダグラスは猶次の如く附言してゐることを引用して置くべきであらう。<sup>14)</sup> 勞働の長期的供給には甚だ弾力性があり、實質賃銀の上昇が人口繁殖率に於ける可成りの増進原因になるとする論理的必然の信念を有する古典的なる經濟學者の學説は、前世紀に於ける諸國の繁殖率が推移せる現實傾向を調査することに依り部分的乍ら検討し得る。

西洋諸國に於ける人々の物質的収入は顯著に上昇した時期が既往に於てあつた。此際に於て何等かの變化を見せたのは之等諸國の自然増殖率であつたか。十九世紀の初頭に於ける出生率死亡率は共に高く、多くの國ではその差額即ち自然増加率は十七八世紀よりも大であつたが、未だあまり大きくはなかつた。然るに十九世紀末葉にて二三ヶ國の出生率は決定的に低落したが、其死亡率は不變であつたので、當該國人口の繁殖率は勿論減退した。併し多くの國々では、醫藥及び一般の衛生施設の改善せる結果として、死亡率は減退し繁殖率も増加した。事實上、多くの場合に於て、出生率よりも寧ろ死亡率の方が先に遞減して居る。併し乍ら此際一般出生率減退が死亡率低下に影響したといふ關係も否定し得ないであらう。

the Last Decades", Economic Journal, 1910. Vol. XX. (cf. Douglas; *ibid.* pp. 349—350.)

9) Paul Mombert, Studien zur Bevölkerungsbewegung in Deutschland 1907. (cf. Douglas, *ibid.* p. 345.)人口問題研究四ノ三四、(昭和十八年三月)、所載、本多

斯くて勞賃上昇が繁殖率に影響ありとする古典派の經濟學說を反駁せるダグラスは、鋒先を轉じて、繁殖率の減退に伴ふ勞働力の長期的供給の減少せる傾向は高賃銀と何等かの因果關係ありと往々にして見做せるが如き近代的なる人口理論を否定せるかの如くである。併し乍ら此際に於て繁殖率を規定せる二要因中の死亡率低下を重要視するの餘弊として、出生率のみを採れば如何にも其の低落と高賃銀との間に密接なる聯關があるかの如き誤解を招く疑ひが皆無とは云へない。されば繁殖率の中で死亡率は顯著に生活程度の影響が認められるにしても、出生率の低下は高き勞賃と直接の因果關係はないと謂はねばならぬ。もし然らずとすれば戦時下の高勞賃や人口政策としての家族手當の如きも支給の根據を失ふであらう。従つて實質賃銀の低下に伴ふ極貧なる生活程度では民族の繁殖率上昇は望めないのと同様に、高賃銀に伴ふ生活水準の上昇に際しても、生計費の割當に於て決して奢侈贅澤をしないといふ耐乏生活の内容による人口増殖<sup>2)</sup>の精神が堅持されねば、戦時下の繁殖率は確保され難いことが結論されるのである。

以上要之、古典的理論に於けるが如く、「勞働の供給」なる術語を明確に規定せず、従つて所謂正統學派の傳統的經濟學者は之を全人口と同義語に置いて考へ、斯かる勞働供給に何等かの變化があれば、必ず出生死亡及び移住來住の諸率に緩漫に作用すると見做す。斯るが故に若し經濟學者が勞働供給に即ち報酬の相場に變化が惹起されてゐるといふならば、彼等は單に長期的變動を考へて居るのであつて短期的變動を考へてゐるのではない。其故に勞働供給が固定された時は何時でも、其だけの人間しか居られない場合であり、其以上は居ないのである。<sup>9)</sup> 同様にして勞働供給の歴史的にして長期なる曲線は上昇直線として移動し、然も斯かる曲線は變數の一つとして時の要因を含んで居らず、従つて其は新派の古典學者達が取扱ふを常とせるの如き「其他の條件を等しいと

龍雄稿「モンベルトの福祉説について」。

10) Brentano, op. cit. Economic Journal, Vol. XX. pp. 385-387.

11) Douglas, ibid., p. 351.

12) R. R. Kuczynski; Population Movements. Oxford, 1936. p. 25. 十九世紀の

する型に於ける短期的曲線<sup>1)</sup>ではない。この上昇傾斜面は寧ろ歲月の経過と共に生活基準の上昇結果に外ならな  
いとするダグラスの言葉は、近代的理論にとつても適切なる注意となるであらう。

換言すれば、實質勞銀と繁殖率との長期的なる變動率の關係は次の如く要約せられる。<sup>2)</sup>

(一)、勞働の供給よりも資本の増殖は急速であり、依つて勞働の限界生産力が高まり、又技術の進歩があるが  
故に實質勞賃は上昇す。(二)、實質賃銀が高まれば勞働者の生活基準は上昇し、この生活水準は根本的には子供  
を持つよりも寧ろ消費したいといふ商品や勞務から構成されるが故に、結果として産兒の僅少性に依りてのみ調  
節されることになる。(三)、斯くて更に勞賃が上昇するといふ類似なる過程が繰り返される傾向がある。

斯くして實質賃銀の上昇が如何にして算出されたかも將來の好題目として研究さるべきであるけれども、最後  
に肝要な問題は實質勞銀と繁殖率との聯絡關係を一應乍らち切つて考へることであらう。既述の如く繁殖率な  
るものは生活水準を通じて單純に勞銀のみに依りて一義的に決定されるとは見做し難い。何故ならば繁殖率及び  
生活水準の内容は夫々複雑にして相異なる條件に依りて規定されて居ることは勞銀に於ても同然であらうからで  
ある。恰も現實の非常戦局からの要請が頗る多元的にして、之に對處すべき政策も亦多方面的とならざるを得な  
いが如く、實質勞銀の一方的なる上昇も繁殖率の増減といふ兩方面の影響を認めるに立至つて居る吾々として  
は、假令民族の繁殖率上昇が永久にして最高なる國家命令であるとしても、之が對策として例へば勞銀手當の増  
減といふ經濟的側面の政策のみでは必ずしも所期の目的を到達し得ぬことを知つた。斯かる個別現象間に於ける  
關係の有無を検討する爲に、理論的研究の必須なることが痛感される。凡そ戦時下に於て必至なる耐乏生活内容  
を、「撃ちてしまむ」の積極的敢闘精神に依りて、戦力強化と増産或は人口の確保の爲に充實せしめる必要が

歐洲人口の増加を専ら死亡率減退に歸して居る。

13) Douglas, *ibid.*, p. 351.

1) *Ibid.*, p. 352.

2) 高田保馬著「民族耐乏」13頁。3) Douglas, *ibid.*, p. 269 and p. 381.

4) "A short-run curve of the *ceteris paribus* type."

ある。茲に生産力及び國防力の根源としてこの勞銀と繁殖率の問題に觸れる意義も認められるであらう。戦時下の高賃銀や耐乏生活は常に必ずしも繁殖率と正比例關係にあるとは限らないから、問題は生産力と生活水準との聯絡をたち切ることばかりに認めらるべきではなく、繁殖力を高賃銀や生活程度を通じるよりも寧ろ直接に國防生産力に相關せしむることにあるであらう。意味する所は時局の要請に鑑み自ら問題に緩急の存することを示すのであつて、生活程度や繁殖率でさへも一時的には犠牲に供しても惜しまぬだけに「常在戰場」の覺悟を踏み固めて置くにある。蓋し民族政策はこの一刹那を未來永劫に生かし貫く道だからである。

従つて民族の高き繁殖率を維持して置くのみならず更に増加せしめんとする目的の爲には、既に可成り高額の勞銀を獲得しつゝある所謂産業戦士中に決して多數の結婚適齡者を獨身の儘に放任して遂には結婚を嫌ばざるに至るまでに自由にさせて置くべきではないにしても、他面に於て刻下の急務たる戦力増強を阻碍してまでも無鐵砲に結婚獎勵に乗出す必要はない。況してや近時喧傳さるるが如き大都市疎開の問題の如きは防空目的の爲には必須缺くべからざる要請であるけれども、民族繁殖率の一般的擴張や國民榮養の永久的確保といふ觀點からは必ずしも常に有效適切なる対策ではあり得ないと覺悟すべきであらう。都鄙を通じて民族の生死がトせらるべき秋に當り、この國民生産力を反映すべき勞銀と繁殖率との結付に正しい比例關係を認め得るに至らしめることを吾々の現在に於ける終始一貫せる目的となるであらう。

5) Douglas, *ibid.* p. 379.

6) 高田保馬稿、「人口と勞銀の趨勢」經濟論叢三ノ六、(大正五年)124頁、しかる複雑なる原因の作用に依りて生ずる、(人口と生産關係より決定される勞銀の)變動は常に直線的なるを得ずして一脹一弛は其免れざる所なり。